

直球の先達・腰原幹雄

朝倉幸子◎TH-1

illustration:Taco◎Switch・エンタテインメント

■豊富なボキャブラリー

インタビューを聞き返す。聞き手の自分と覇志堂がこんなにも饒舌だったのかと、驚いた。木造構造デザイン工学の第一人者、東京大学生産技術研究所教授の腰原幹雄先生は、相手の関心を見すかして、即座に同じ土俵に引き入れてしまう。闊達な才気と元気な表現、光る眼。ワークショップで研究の成果を倍増させているのは間違いないだろう。造語の達人でもある。「メカメカしている空間でしょ!」などと、臨場感ある言葉が随所に飛び出す。建築に絡む大きな流れを、牽引している様子が伝わってきます。

「修士を出て、個人構造事務所に行くなんて世も末と言われた時代」に、ヒネクレ者だったので、構造設計集団〈SDG〉の門を叩いたという。渡辺邦夫先生の「ナニしに来たの?」が、即採用の合図で、1994年から6年間在籍。昔の記号だけの面白くない構造図に、初めて形の図を入れたのがSDGで、かっこいい構造模型をつくって、「意匠屋さん仕上げを貼らせるな」の合言葉で、真摯に建築に向き合っていた。思い出深いという牧野富太郎記念館の、現場常駐での監理は如何ばかりだったろう。

■箸と感覚

コップの上に、バランスよく箸を置いてみる。どんどん一片を長くしていくと、ある所でカタンと落ちてしまう。構造の感覚とはこんなところにあるという。高度な力学が頭に入っていないなくても、計算上でよりも、ココまでなら大丈夫という感覚が大事だ。先生自身は、モチロン並外れた感覚をもたれている。が、材料性能が上がっているのに、昔の感覚でやってしまうと「ヤバイ」と思うと、冷静な技術者魂が覗きます。

図面は、現場へのメッセージである。青焼き時代の図面には、証拠が残っていた。現在のCADの図面では、設計者のこだわりや意図している箇所と、

たまたまできたところかの見分けがつかない。「施工側に伝わりにくいですよ」と、憂う。確かに、そのとおりと思うことも多いデス。

「建築確認申請のセイで、建物が設計者の能力で決ってしまう」とは? 説明されてこれも同感なり。施工者に、設計図以上に適切な納まりの案があっても、確認申請上簡単に変更されなくて、一番現実を知らないヒトが、描いたままになってしまうこともある、というのです。

■何を建築と呼ぶか

「研究」が仕事で、「建築」が趣味と思っていた頃もあった。しかし、今は何を建築と呼ぶのだろうか、という思いに至っている。「街並み調査と観光って……違いますか? 調査先で盆踊りに参加していいのです」。腰原先生は、自分は楽しいことしかやっていないのですよと、言う。いや、かかわる仕事のすべてを楽しく、面白くしているのだと。「余計な手間をかけるから面白いのであって、ルーティングでやるのとは違いますよ」。「器用貧乏にならないでくださいね……」とは、覇志堂のアニキ心です。

今、建築家のつくる住宅に対しても一家言ある。誰も真似ができない建築をつくるより、真似をしたくなる建築をつくってはどうか。そしたら、街並みも整ってくるはず。街が変わり、都市が変わる、そんな未来を目指そうと語られた。

数知れぬテーマと切り口が、先生の頭脳には詰まっている。「その整理は手づくりの手帳」。1週間1ページでスケジュール管理。実は、とてもナイーブな神経の先生なのです。

